

## 平成 21 年度 第 3 回 平塚市博物館協議会 会議録

### 開催日時

平成 22 年度 3 月 17 日（水）10 時～12 時

### 開催場所

平塚市博物館 特別研究室

### 会議出席者（敬称略）

会 長 江藤 巖

委 員 片山 興大、立山 洋典、牧野 久実、村松 芳男、森島 啓子

事務局 明石館長、井上館長代理、鷹館長代理、栗山学芸員

### 会議の概要

#### 1 館長あいさつ

今年最後の協議会になります。議題が盛り沢山ですが、よろしくお願ひいたします。

#### 2 会長あいさつ

本年度最後、また私達の任期も最後となりますが、みなさん、いろいろとありがとうございました。本日、協議委員 6 名全員がご出席ですので、さっそく議題にはいりたいと思います。

#### 3 議 題

##### （1）報告事項について

1. 入館者数及びプラネタリウム観覧者数

2. 第 11 回博物館まつり

3. 報道された主な博物館事業

1～3 について、鷹館長代理から協議会資料により説明。

4. 春期特別展「検証 相模国府～古代都市復元への挑戦～」について、栗山学芸員から協議会資料により説明。

##### 〔質疑応答〕

委 員：博物館まつりについて、現在 S C N で放映されています。今回、通常は一方からしか見えない有孔罎付土器や三角縁四神二獣鏡を 360 度見ようということで展示しましたが、解説は人気があって大成功でした。まつりは、こうした形で地域の人々の関心を集めることができる良いチャンスだと思います。

委 員：先の報告で、今回のまつりの入場者数が昨年に比べ減少したとのことでしたが、今年は J 1 に昇格したベルマーレの試合があり、駐車場など、影響があったかもしれませんね。

委 員：イベントの報道についてですが、記事に出ると結構インパクトが大きいものです。これは記者ポストなどに入れておくだけですか。

事務局：記者発表は市の広報担当に情報を出します。特別展など大きな事業の場合、月 1 回の市長の定例会見で取り上げられると、何社からも報道されたりします。小さなできごとは投げ込みという形で記者さんにお伝えしますが、できるだけ広報を通すようにしています。平塚海岸でのウミガメの産卵のように、記者発表では間に合わない情報は早く流すこともあります。

委員：展示解説ボランティアをしていますと、報道記事を見て来館される方もいますので、情報宣伝活動は大事だと思います。

委員：私も神奈川新聞で“戦争と食“というシリーズの取材を受けたことで、その後も別の取材を受けることになりました。記事の影響は大きいものだと思います。

(2) 平成 22 年度事業予定 (案) について

特別展、寄贈品コーナー、プラネタリウム、体験学習、その他の全館的事業について、鳳館長代理から協議会資料により説明。

(3) 平成 22 年度予算について

事務局 (井上館長代理) から協議会資料により説明。

[質疑応答]

委員：プラネタリウム設備改修事業ですが、リースということでしょうか。

事務局：改修事業の内容ですが、委託料で古くなったドームスクリーンの改修また座席も 25 年前当時の中学生の体格・生徒数に合わせたもので、最近では学級人数も減りましたし、現在ではご年配の方や車椅子の方が利用されますので、バリアフリーなど、来館者対象を広く考慮する必要があり、数は 70 席程に減りますが、座席や通路幅を広くします。またカーペットも張替えます。次にプラネタリウム機器賃借料ですが、プラネタリウム本体のリースの支払いとして考えています。

委員：今もリースですか。

事務局：今は備品扱いで買い取りです。

委員：使わなくなった G-1014 は展示コーナーができそうですね。

事務局：初代の器械などは 1 階の展示コーナーで展示しています。2 台目も多少は部品を残しておけるかと思います。他の施設から要望があれば提供することも考えられます。

委員：リース料は次年度から毎年予算をつけてもらわないといけないですね。

事務局：総合計画のなかの実施計画で決められていますので中止になることはないと思います。

委員：リニューアル・オープンの「銀河鉄道の夜」は初めての番組ですか。

事務局：2 年前に美術館の「宮沢賢治展」とタイアップして行った番組ですが、今回はフルバージョンで上映します。その後 CG が作り替えられた部分もありますので新鮮味が出ると思います。前回、見ていただけなかった方に、ぜひ見ていただきたいと思います。

委員：公共団体である平塚市がこういう経済情勢のなか、プラネタリウム改修に踏み切ったということですが、平塚市の姿勢が素晴らしいなと思います。市にそういう声をぜひ伝えていただきたいです。もちろん、館の方々の長年の努力があったからだと思います。

(4) その他

委員：学校への出前授業の要請はどのくらいありますか。

事務局：考古では小学校の土器作りや縄文時代の暮らしについてなど、年 4 校ぐらいでしょうか。秦野など市外もあります。

事務局：あと夏休み前など、星の観察について年に 2～3 校でしょうか。

委員：入館者数のほかに、出前授業など、博物館が出かけて活動された時の人数もカウントして集計するとよいのではないですか。

事務局：公民館での講座などもありますね。

委員：学校関係で呼びかければ、美術館見学のルートの中かで時間を調整して博物館を見学できると思います。

事務局：出前授業についてのデータですが、平成20年度の考古部門など、だいたい年に3～4校は行っています。

事務局：小学校3年生などが来館した時は、展示解説ボランティアの方が、民家を中心に平塚の昔の暮らしを体験・見学してもらっています。

事務局：来館者数とは別に対外事業のデータも検討したほうがいいかもしれませんね。以前、公民館まつりで生物や考古部門など、地域の方々に見ていただけるよう展示をしたこともありました。

委員：城島で預かっている資料を授業の中かで活用しています。教材として資料の貸し出しは可能でしょうか。

事務局：影響の無いものについては基本的に貸し出し可能です。

事務局：制度化した形で、貸し出し資料のリストを公表したことはないのですが、毎年決まった単元の時期に集中すると数が限られるので応じきれない場合もありますが、ある程度の用意はしてあります。

委員：他の学校でも活用したいという希望があれば、教材の貸し出しや出前授業を博物館に相談するように勧めたいと思います。授業の中かで資料の実物を見ることは効果的ですね。

委員：出前授業の対象も数に入れたほうがいいのではないかと思います。私も博物館を通じて小学校に頼まれ、館の資料をお借りしてお話をしたことがあります。

事務局：資料の館外貸し出しのデータを見ますと、やはり学校関連への貸し出しが多いですね。

委員：学芸員だけでなくボランティアの講師派遣も含め、先程の出前授業などの館外利用者数をカウントしたらよいのではないのでしょうか。

委員：例えば「国府を歩く」というような活動などはカウントされていないのですか。

事務局：事業参加者数としてカウントしています。

委員：事業計画の中かで、相模川というテーマであれば、流域にある他の博物館など、また地質や歴史で各テーマに関わる県内の博物館を、意識されているのかどうか知りたいのですが。例えば、遠くまで行けない地域住民のために、他の館にある国宝の仏像のような宝物を借りてきて展示するには連携システムが必要だと思うのですが、これまでどうなのでしょう。

事務局：各部門の担当学芸員がそれぞれ常に他館と接触して情報収集を充分心がけています。重要文化財、また国宝級のものでも、当館の特別展示室は施設としての条件は整っています。相模川流域という館のテーマに見合うものであれば、必要な資料はお借りしてきて公開できます。

委員：県内の博物館で全体の連携がとれるような連絡協議会はないのですか。

事務局：神奈川県博物館協会や、その部会があります。それぞれの専門の担当者が常に情報交

換しています。

事務局：以前は県主催の巡回展をしていました。そういう場合は、横浜などのいくつかの施設が動いて、地域の施設をまとめて巡回の仕組みをつくる形になると思います。学芸員の世代が代わり、これからまた新たな動きが出てくるかもしれません。

事務局：今のところ、相模川流域のテーマで手一杯の状態ですが、今後、大きな領域でまとまって、他館と連携を深めて共同テーマで展示を行う動きが出てくるかもしれません。どの館も財政的に厳しいですので、共同で良い成果をあげる形が進むかもしれません。

委員：県と市との関係ですが、現場の専門家同士ではなく、館全体としての情報交換など、お互いのつながりはどうですか。

事務局：館同士ではなく、やはり個人ですね。過去に一時期、民俗分野で県と共に研究・展示活動をしたことがあります。

事務局：自然系の生物・地質などは情報交換などが行われているようですね。

委員：平塚市民のための博物館として地元重視という印象が強いのですが、そればかりでなく、「銀河鉄道の夜」などのように、時には市民の眼を広く外に向けることも平塚市民のためによいのではないかと思うのですが。

事務局：どのように取り組むべきか、いろいろな試みをしています。地域のことを取り上げるにしても、自然環境など、そのバックグラウンドやつながりを説明していかないと本当の理解にはならないと考えています。それを展示するには館の大きさから厳しい面がありますので、10回の特別展のなかで1～2回は、より広く見ることができればと考えています。今のところ、それぞれの学芸員がまだ地域のことを出し切れていない状態でもありますが。

委員：今回の特別展も大きくて深いテーマで、期間が1か月ではもったいないですね。

事務局：博物館も出発点のゼロから点、点から線になってきて、次からは面に広げていきたいところですが、こうした仕事は5年、10年と時間のかかることだろうと思います。

事務局：博物館は学芸員のライフサイクルと共に展開する面があるので、調査活動に専念する時期、外部とのつながりを深める時期などがあります。時期がうまくずれてくれればバラエティに富んだ事業活動ができるのですが。

委員：学芸員の調査研究期間がある程度あって、それを今度は市民へ還元する時期があるという、その繰り返しということでしょうか。

事務局：一人の学芸員の30年という時間のなかで、その時にやりきっておかないと後が続かないという時期があります。教育普及活動を活発にすることは大事ですが、引き出しが空っぽになると困りますので、多少大目に見ていただければと思います。

委員：NHKの番組ですが、国立博物館で仏像をただ陳列するだけでなく、ライトの角度で仏像の表情が変わるということが受けて、若い来館者が増えたそうです。ただ、仏像は本来そのように見るべきものではないとの声があつて止めたということです。今、博物館は来てもらうために工夫をして変化してきた、ということなのですが、大衆受けを狙って来館者数が増えることで評価するのではなく、博物館の本来の意味合いを考えるべきだということを行っているのだと

思います。とにかく大衆迎合で来てもらえれば良いということではなく、先程のように、ある時期は館全体で自分たちの力を貯めなくてはいけないというのは、先を見た考え方であると思いました。

会 長：いろいろなご意見をありがとうございました。